

中国のほんの話 (35)

中国の繁栄は見せかけにすぎない？

女性経済学者・何清漣

蔭山 達弥



いま、日本の電気工事会社の資材置き場から、ケーブルや電線が次々と盗まれていることをご存知ですか。実は、「世界の工場」を稼働させていくために世界中から資源を買いあさっている中国に売って儲けようとする不心得者の仕業らしいのです。

この秋、翻訳が日本で出版され、話題を呼んでいるのが、元『フィナンシャル・タイムズ』北京支局長のジェームズ・キング (James Kings) 氏による『中国が世界をメチャクチャにする』(原題 China shakes the world、草思社) です。非常に過激なタイトルなので、一瞬ドキッとさせられますが、市場経済参入により、人口 13 億人の中国パワーが世界を揺るがしていることは紛れもない事実なのです。中国から来た不法移民に乗っ取られたイタリアの織物産業の町プラート、安い中国製品に圧迫され、衰退するアメリカ中西部ロックフォードの工作機械産業、激増する中国の木材・食料需要による世界各地の森林の消滅など、筆者が世界各地を取材して回った衝撃的な報告です。先日も、民放のニュース番組で取り上げていましたが、中国の人口の 3%、約 4,000 万人の富裕層がマグロを食べ出したおかげで、マグロの水揚げが減り、価格が高騰し、そのうちマツタケのように簡単には我々庶民の口に入らなくなるだろうと予測していました。しかし、中国は成長を止めることはできません。成長が止まれば、民衆の不満がますます増えて、社会的混乱を抑えられなくなるからです。

このような中国が抱える矛盾を十年前から既に分析していたのが、中国人女性経済学者の何清漣氏です。氏は 1997 年、一党独裁体制下で進む市場経済化が招く貧富の格差や国有資産の流出などの問題点を分析した『中国の陥穽 (かんせい)』を香港で出版。翌年、内容を一部削除して、『現代化の陥穽』(今日中国出版社、1998) を中国国内で刊行し、知識人から圧倒的な支持を得て、海賊版を含め 300 万部を売るベストセラーになりました。ところが、「現代中国の社会構造変遷についての相対的分析」という氏の論文を当局が問題視、著書は発禁となり、自身は国家安全部の監視下におかれたため、2001 年に中国を脱出してアメリカへの事実上の政治亡命に踏み切りました。『現代化の陥穽』は『中国現代化の落とし穴』(草思社、2002) という書名で日本語版 (修正された完全版) が出ています。

何氏は 4 年前に来日した際、「中国では 15% の権勢者が権力を利用して 85% の富を独占している。不満を鬱積させた残る 85% の大衆はいずれ富を暴力で奪い返すだろう。」と警告しています。何氏によると反政府デモは中国全土で年間 1 万件以上発生しており、腐敗、汚職がはびこる中、貧困層の不満は沸点に近づいているそうです。

アメリカへ出国してから初めてのまとまった論考である『中国の嘘』(扶桑社、2005) の終章のなかで、何氏はこう述べています。「中国人民にとってすこぶる諷刺的な意味を持っているのは次のような事実である。それは続々と導入される外資が中国の専制政府に輸血され、この政権を延命させていることである。中国の大都市住民はまだ外資のもたらす恩恵に浴しているが、9 億の農民は農村で苦しみにもがいている。2003 年末までに、土地を失った農民は 8,000 万人にも上る。中国の農民には希望のかけらもない苦しみから逃れるために、自殺を選んで命を絶つ者が少なくない。…中国人は今まさに自身の権利のために苦闘している最中である。なかでも農民の反抗は最も悲壮であり、原始的な武装しか持ちあわせていない農民たちが組織的な抗争を始めている。90 年代後期以降、こういった抗争が毎年 1 万件以上発生しているが、いつも完全武装した政府に武力鎮圧されている。」

中国はいったいどこへ向かおうとしているのか、恐怖と苦闘の中で真実を伝えようとするジャーナリスト達の声に冷静に耳を傾けようではありませんか。

かげやま たつや (教授・中国文学)